

2017/06/25

「神のために？」

● 「神のために」生きよ？

私たちは「神のために」生きる、あるいは「神のために」頑張ると言う。聖書も次のように教えている。

「日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。」（ローマ 14:6-8 新改訳）

この御言葉は、「神のために」生きること、すなわち「神のために」頑張ることを教えている。原文を見る限り、確かに上記のように訳せる。しかし、この原文は次のようにも訳せる。

「日を守る人は、主と共に守っているのであり、食べている人は主と共に食べています。なぜなら、その人は神に感謝しているからです。そして、食べない人は主と共に食べないのであって、神に感謝しています。私たちの中で誰も自分自身で生きている者はなく、誰も自分自身で死ぬ者はありません。もし私たちが生きているとすれば、それは主と共に生きているのであり、もし死ぬとすれば、主と共に死ぬのです。そういうわけで、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。」（ローマ 14:6-8 私訳）

ここで「主」と訳されている言葉は「与格」であり、そこには前置詞がない。ただの「与格」の場合、新改訳のように「…のために」とも訳せるが、「…と共に」（英語の with）とも、「…に於いて」とも訳せる。どう訳すかは、訳す人の解釈に懸かっている。似たような例に、「神のために実を結ぶようになるためです」（ローマ 7:4 新改訳）という御言葉があるが、これも「神」はただの「与格」なので、「神に於いて実を結ぶようになるためです」とも訳せる。

他にも、新共同訳は「主のために苦労して働いているトリファイナとトリフォサによろしく。主のために非常に苦労した愛するペルシスによろしく」（ローマ 16:12）とし、「神のために」生きることを推奨する意味に訳している箇所を、新改訳は「主にあって労している、ツルパナとツルボサによろしく。主にあって非常に労苦した愛するペルシスによろしく」と訳し、「神のために」ではなく「神にあって」生きることを推奨する意味に訳している。これは、原文の「主」を見ると、「…の中に」という意味の前置詞「エン」[ἐν]が付いているので、この場合「神にあって」生きるが正しい。

また、新改訳はⅠコリント8:6を、「私たちもこの神のために存在しているのです」と訳しているが、新共同訳は、「わたしたちはこの神へ帰って行くのです」と訳している。これも前置詞をどう訳すかで変わってしまう例だ。さらに新改訳では、「私たち自身は、イエスのために、あなたがたに仕えるしもべなのです」（Ⅱコリント4:5）とあるが、この場合の「イエスのために」とは、理由を表す前置詞「ディア」[διά]が付いているので、「イエスのゆえに」という意味になる。他にも、「神のために」生きることを推奨するような意味に訳されている箇所が多々あるが、そのどれもが別の意味にも訳せる。

何が言いたいかという、確かに「神のために」生き、「神のために」頑張ることを推奨するような意味に訳された御言葉はあるが、それらは「神と共に」、あるいは「神にあって」とも訳せるということだ。しかし、この訳の違いが、クリスチャンの生き方を大きく左右してしまう。訳によって、クリスチャンは「神のために」生きる者なのか、はたまた、「神と共に」生きる者なのかを決めてしまう。ならば、どちらの訳が正解であり、どう生きることを神は望んでいるのだろうか。今回のコラムはそのことを考えてみたい。

#### ● 僕ではなく「友」

私たちは神の「僕」であり、「神のために」生きるものだと一般に思われている。しかし、神の側は人を「僕」とは思っていない。「友」だと思っている。信じがたいかもしれないが、そのことは、次のイエスの言葉を見れば明らかだ。

「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」（ヨハネ 15:15）

イエスは弟子たちに対し、はっきり「友」と呼ばれた。神と人との関係は、友としての関係であることを述べられた。別の言い方をするなら、人はキリストの体の器官ということだ。体を構成する器官というのは、どの器官が偉く、どの器官のために生きるという縦の関係ではない。あくまでも互いを支え合う、横の関係にある。キリストと私たちの関係は、まさしくそうした関係だとイエスは言われたのであった。ゆえに聖書は、次のように教えている。

「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」（Ⅰコリント 12:27）

つまり、人はキリストの部分なのであって、キリストと共に生きるように造られた。「私たちはキリストのからだの部分だからです」（エペソ 5:30）。このことは、人の姿となって来られた神の呼び名からも知ることができる。「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味

である。)」（マタイ 1:23）。以上の考察から、人は「神のために」生きるのではなく、「神と共に」、あるいは「神にあって」生きる存在だということが分かる。それが神の望みであり、人はそのように造られている。

ところが、私たちはそうした神の思いとは裏腹に、神の「僕」を目指す。「神のために」と言い聞かせ、神に愛される「僕」になろうと一生懸命頑張る。というのも、こうした「…のために頑張る」という仕方は、この世界では実に美しい生き方とされるからだ。親は家族のために頑張ると言い、会社員は会社のために頑張ると言い、野球選手はチームのために頑張ると言い、オリンピック選手は国のために頑張ると言い、この世界では誰もが、「…のために頑張ります」を目指す。その昔も、武士はお殿様のためにと言い、奴隷は主人のためにと言い、人は「…のために」を目指して生きていた。それこそが美しい生き方だと信じられてきた。それは昔も今も全く変わりが無い。だからクリスチャンも、「神のために」を合い言葉に頑張る。一見すると、これはまことに美しい生き方のように見えるが、しかし、神の思いはそこにない。それはなぜか。人は「…のために」という生き方などできないからだ。

#### ● 本当に神のため？

私たちは「神のために」頑張ると言うが、そんなことがそもそも可能なのだろうか。残念ながら、100%純粋に神のために頑張れるという者などいない。全き善を行える者は一人もいない。そこには必ず「神のために」と頑張ることで、神からの祝福を期待する心が見え隠れする。それ以上に、「神のために」頑張ることで周りからよく思われようとする思いが、堂々とのさばっている。人の目に怯え、人から少しでも立派なクリスチャンだと思われるべく頑張る自分が、「神のために」という御旗の下に歴然と横たわっている。そうなれば、それはもう「神のために」ではなく、「自分のために」である。「神のために」という美しい仮面をかぶり、自分への報酬のためにしている。ゆえに聖書は、人の行為を次のように切り捨てる。

「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行う人はいない。ひとりもない。」（ローマ 3:10-12）

弟子のペテロを思い出してほしい。彼はイエスの前で、主のためなら命さえも惜しまないでついて行くと豪語した。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております」（ルカ 22:33）。「神のために」頑張ると言い張った。しかし、ペテロがそう豪語した背景には偉くなりたいという「肉の思い」があった。そのことは、このペテロの発言の直前に勃発した弟子たちのやり取りを見れば分かる。「また、彼らの間には、この中でだれが一番偉いだろうかという論議も起こった」（ルカ 22:24）。周りから良く思われたいというペテロの思いが、「主のために」なら命さえ惜しみませんと言わせたのである。

無論、本人の意識としては純粹に「主のために」であった。しかし、イエスが罪人として捕らえられ殺されそうになると、周りの目を恐れてイエスを知らないと言ってしまった。その時初めて、ペテロは自分の中に横たわっていた本心に気づいた。イエスのことよりも、まさに人のことを思っていた自分と出会ったのである。イエスは、そうしたペテロの思いを初めから見抜いていたので、かつて、「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」（マルコ 8:33）と注意されたが、ペテロはその意味をようやく悟った。

このように、私たちは「神のために」といくら豪語しようとも、そこには自分が良く思われようとする「肉の思い」がのさばっている。ただし、自分の意識としては「神のために」ではないので、ペテロがそうであったように自分の「肉の思い」には気づかない。しかし、パウロのように気づいて、「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています」（ローマ 7:19）と告白する人もいる。いずれにせよ、人は「神のために」など生きられないことを聖書は教えている。どうあがいても、人がすることは「自分のために」となってしまう。ゆえに神は、「神のために」頑張れなどとは教えない。そんなことを教えれば、ますます人は誰が偉いかと競い合い、「自分の評価のために」生きてしまうからだ。そもそも、神は人の助けなど必要としない。

#### ● 人の助けなど必要ない

こんな話を聞いたことがある。あるとき、家が火事になったことに気づいたおばさんがいた。おばあさんは、何があっても仏壇だけは助けなければと思い、すぐに仏壇を運ぶよう家族の者に言った。それを聞いた孫は、おばさんに質問した。「おばあさん。仏壇は神様だと言っていたのに、この神様は自分で自分を守れないの。人の助けが必要な。そんな神様が、どうして人を救えるの…」。

それ聞いたおばあさん、尤もな話だと深くうなずいたという。

人の作り出した神は人が作った以上、常に人の助けを必要とする。しかし、私たちが信じるキリストは私たちが造られた神であって、人の助けなど必要としない。助けが必要なのは、造られた人の側である。したがって、私たち人間が「神のために」などと言うのは、まことに恐れ多いことだ。それではまるで人の方が上に立ち、偉くなってしまう。

私たちはどこまでいっても神の被造物であり、神の助けを必要とする者である。つまり、私たちが神に対してでき得ることは、ただただ、神にあわれみを乞うことではない。神を信頼し、神により頼むこと、これが全てである。イエスはそのことを教えるために、譬えを通して次のように言われた。

「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。」（ルカ 18:13-14）

イエスはここで、神が義とするのは「私をあわれんでください」という叫びであり、人が神に対してでき得ることはこれだけだと教えられた。同時にイエスはこの譬えで、「神のために」これだけのことをしましたと言ったパリサイ人のことも取り上げ、「私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております」（ルカ 18:12）、彼は義とされない旨を教えられた。「パリサイ人ではありません」。

すなわち、神が喜ばれるのは、「神のために」何かをするというのではなく、罪人である私たちが神により頼むことにほかならない。これを「罪人が悔い改める」というが、神は人の「悔い改め」こそ喜ばれる。

「あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」（ルカ 15:10）

聖書が言う「悔い改める」には、その日本語が意味する「反省する」という意味はない。あくまでも、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」と、神に助けを乞うことをいう。そうすれば、神は私たちの罪を赦し、そのまま愛してくれる「神の愛」を受け取れるようにしてくださる。この「神の愛」が私たちを生かし、私たちの心に「平安な義の実」を結ばせる。神はまさに農夫であり、人の心に「平安な義の実」（ヘブル 12:11）を少しでも多く結ばせたいと願っておられる。

#### ● 人は「枝」である

このように、神には人の助けなど必要ない。助けが必要なのは、神によって造られた人の側である。人が「神のために」頑張り、神に実を結ばせるのではなく、神が人の心に実を結ばせてくれる。ゆえに、私たちはただ「神の愛」に留まってさえいればよい。「わたしにとどまりなさい」（ヨハネ 15:4）。これが「神と共に」であって、「神にあって」生きることの実際になる。イエスはこれを、神を「ぶどうの木」、人をその「枝」に重ね、次のように言われた。

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」（ヨハネ 15:5）

「枝」は、実を結ばせる努力などしない。何もしなくてよい。ただ木につながってさえいれば、木が必要なものを全て供給して実を結ばせてくれる。イエスは、神と人との関係も、まさにこれと同じだと言われた。人が神のために生きるのではなく、神が人のために生き、「平安な義の実」を結ばせてくださるとイエスは教えられた。

この教えから、私たちの生きる理由が分かる。それは、神が私たちの助けを必要とするからではない。神が私たちを愛し、「平安な義の実」を結ばせたいから生きる。神に愛されることが私たちの生きる理由であり、人が存在する唯一の理由にほかならない。

すなわち、周りから良く思われようとする生き方しかできない私たちを、自分のためにしか生きられない私たちを、まことに罪深いことを繰り返す私たちを、愛される価値などないと思える私たちを、それでも神は赦し愛してくださるからこそ、人は生きられるのである。罪人である私たちのためなら「いのち」さえも惜しまないキリストの愛があるからこそ、私たちには存在する理由があり、生きる理由がある。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ 5:8)

神は私たちの生みの親であり、私たちは「神の作品」である。「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです」(エペソ 2:10)。そうであるから神は人を愛し、「人のために」生きてくださる。人がどのような罪深い状態にあろうとも愛して支えてくださる。まさに神は「ぶどうの木」であり、私たちはその「枝」であり、ただこの「神の愛」に留まりさえすればよい。留まるには、それでも人を愛するという「神の愛」を受け取る「勇気」だけが必要になる。

しかし、人は自分の罪深さを知るがゆえに、自分なんか愛されないと思っている。自分を「ダメな者」と信じて疑わない。そのため、人には「神の愛」を受け取る「勇気」などない。人にとって最も困難なことは、それでも人を愛するという「神の愛」を受け取ることである。だから人は、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」(ルカ 18:13)と叫ぶしかない。そうすれば、神は否が応でも「神の愛」を受け取らせてくださる。まことに神が人に望む「勇気」とは、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」に尽きる。ゆえにイエスは、この「勇気」を義とするとされた。「あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました」(ルカ 18:14)。

#### ● 頑張らなくていい

あなたは「神のために」頑張らなくてとは自らに言い聞かせ、自分を追い詰めてはいないだろうか。頑張ることで、神に愛される「良き者」になろうとしていないだろうか。確かにこの世界では、頑張らなければ愛されない。頑張らなければ「良き者」としては見られない。しかし、神と人との関係は違う。私たちは神によって造られた者であり、造られた側は愛されるために頑張る必要などない。そのことを知る出来事がある。それは、十字架に架かれる前、一人の女性がした出来事であった。

「イエスがベタニヤで、ツアラアトに冒された人シモンの家におられたとき、食卓に着いておられると、ひとりの女が、純粹で、非常に高価なナルド油の入った石膏のつぼを持って来て、そのつぼを割り、イエスの頭に注いだ。」(マルコ 14:3)

それを見た何人かの弟子たちは憤慨し、「何のために、香油をこんなにむだにしたのか。この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに」(マルコ 14:4-5)と、その女性を責めた。しかし、逆にイエスは、この女性のしたことに感動を覚え、その理由を次のように言われた。

「この女は、自分にできることをしたのです。埋葬の用意にと、わたしのからだに、前もって油を塗ってくれたのです。」(マルコ 14:8 新改訳)

イエスはこの女性がした行為を、「自分にできることをした」と言ったのであって、「できる限りのことをした」とは言われなかった。「自分にできることをした」とは、頑張ったわけではないことを意味する。イエスは、この女性が頑張らなかつたことに感銘されたのであった。

実はこの女性、かつてイエスが涙されるほどの不信仰の罪を犯したマリヤである。兄弟のラザロが死んだ後にイエスが来られたので、いくらイエスでも手遅れだとマリヤは大いにつぶやいた。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」(ヨハネ 11:32)。この後、イエスは涙を流されラザロをよみがえらせた。それを目の当たりにしたマリヤの魂は叫んだ。「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」と。そこでイエスはマリヤを初め、そこにいた人たちに、ラザロに巻かれていた布をほどいてやりなさいと優しく声を掛けられた。そのことを通してマリヤは知った。イエスが涙されるほどの罪を犯したにもかかわらず、それでも赦され愛されていることを。

こうしてマリヤは「神の愛」を受け取り、「神の愛」に留まった。その結果、「神のために」頑張る「良き者」を目指そうとすることがもうできなくなり、「自分にできることをした」となった。イエスはそのことに感動され、「この女は、自分にできることをしたのです」と言われたのである。

このように、神が人に望んでいるのは、それでも愛する「神の愛」を受け取ることに尽きる。それを受け取ることが神に留まり「神と共に」生きることであり、それが神を信頼し愛する者へと変えてくれる。愛されようと頑張る生き方を放棄させ、自発的に「できること」をする者へと変えてくれる。あのマリヤのように、高価なナルド油であっても構わず捧げたくなり、何をしようともそこには自由と喜びがある。それは、まことに楽しい。なぜなら、それでも神に愛されている自分を受け入れているからだ。神は、そうした自由で楽しい人生を、人が「神と共に」過ごすことを願っておられる。